

わたしの戦争体験

宗像市 佐藤 忠義

○須佐の人々

朝鮮釜山で第一商業学校に入り、昭和20年4月海軍甲飛（通称予科練という）に志願、連絡船金剛丸で日本内地に渡った。山口県須佐である。連絡船が着いたのは初めてということで民家を民宿代わりに充てられ、16、7歳の少年たちは、入隊前の一時民家の奥さんたちに優しく接待を受けた。

この時の暖かい思い出は忘れられない。

須佐町の奥さん、娘さん達。そうです、この時代、青壮年男子は町や村にはいないのです。根こそぎ「第二乙種（いうならば障害者、病弱者など）」まで召集されていた。男たちは動員されていたのですから。

食糧、収入乏しく、日々の厳しい生活の中から彼女たちは、懸命に僕ら少年たちを接待してくれた。彼女たちは知っていた。「この少年たちは近い将来、特攻隊に入って死んでいくであろう」。だからその心情が少年たちの胸に響いたのでしょう。（須佐には今年になって訪ねて参りました。）

○分隊士との出逢い

防府海軍通信学校（山口県防府市）に配属された私たちは、「海軍甲種飛行予科練習生」なのですが、昭和20年5月、既に陸海軍とも特攻機を除いて飛行機は無く、訓練はすべて山中での歩兵戦闘訓練の終日でした。6月頃から米機B29の来襲は激しく、その規程コースは豊後水道北上で、毎夜3～4回は非常呼集で睡眠不足のフラフラ状態、5分も時間があれば地べたに眠り込むという日常でした。こうした生活の中で忘れることのできない人、あの分隊士（練習生には班長ともいえましょう）のことで。残念でならないのは名前を忘れています。悔やんでいます。

山中での戦闘演習のある日、彼は「皆、俺の周りに座って海を眺めろ」といった。他の分隊が汗を流して訓練している時、『どうして??』と不審顔だった。「まあいいから俺の話を受け、眼下にはお前達の兵舎が見えるだろう、あれはやがてアメリカのメリケン粉倉庫になる。お前たちは捕虜になってテキサス州の炭坑掘りをやらされる。」……分隊士何を言い出したのだろう……と皆怪訝の表情をしていた。

「防府湾が眼下だ。ここは連合艦隊の誇る長門、武蔵、大和が停泊していたいわば海軍要衝の地である。そこがだ、守備力はどうだ、本土決戦をいわれる今、明治38年の大砲が据えられている。その他の火器も大したことはない。米機動部隊の火力の前には大人と子供だ。帝国海軍要衝の地でさえこのザマだ、まして他は……。」

「お前たちこの位厚いピフテキ食ったことがあるか（指で15cmの幅をつくる）。東京、大阪は空襲で焼け野原だが、絶対安全な地下壕でこんなテキを食って、女を抱き、酒を飲んでいる奴がいる。……」「サイパンやグアムから飛行機が要求される。優秀な搭乗員が空輸にやってくる。どうだろう、新品の飛行機が空輸中分解して墜落する。10機中2～3機、かけがえのない搭乗員の生命が奪われる。資本家たちはこんな理不尽さで利益を得ているものがあるんだ。」「だが、彼らも本土が焼土になり、何よりも自分の子供たちが戦火に倒れていることに気づいた。考えを改めだしたのだ。」……皆はボーゼンとして聞いていた。

分隊士こんな事を言って憲兵が来るぞと、私は恐れた。彼は続けた。「日本はもう最後の際に立ってる。これを救うものは何か、君たちの赤い血だ、もうそれしかない……」。彼は涙と共に絶句した。

常に若い練習生を労わり、長い角材が在ればノコで切り刻み、練習生が尻を叩かれないように、食事はできるだけ残して練習生に分けるようにした分隊士。戦後の今になっても彼のこの言葉は鮮明に残っている。

防府海軍通信学校第203分隊です。

○ソ連宣戦

8月8日深夜、総員起しの命令が出された。兵舎横の堤防前に全練習生が整列し、堤防上の指令を見上げた。月が蒼白くこうこうと照らしているのが印象に残っている。

「練習生諸君、本日、ソビエト軍はソ連満州（現在、中国東北地方）国境を突破、満州に進撃を開始した。日本はまさに存亡の危機といえる重大な局面に立たされるに至った。苛烈極まる南方戦線は、サイパン、グアム、硫黄島、そして沖縄まで玉砕する事態になっている……。ここに至って祖国、日本を守る砦は、君たちの若い血潮しかない、決意を新たにして祖国を死守してもらいたい……。」

月光をバックにしているので指令の顔は判らなかったが、一言一言が胸にくい込んでいた。いよいよその時（死）が来たのだというのが、若い皆の思いだったろう。

敗戦のショックに打ちのめされながら、すしずめの復員列車は長州路を走っていた。

「神州は不滅であり」「神風が日本を守る」「一天万乗の君在す」。こうした不動の観念は、敗戦を容易に受け入れることはできなかった。

列車が下関に入ったのは夜だった。『あっ……』と驚いた。街に電気がついている、それもいっばいにだ。考えられない異様な光景であり、敵機が来たらどうする……といきりたつような思いがした。

……だがわかった。

「戦争が終わったんだ」「これが平和なんだ」と思った。

今から見れば戦火の残存、少ない灯だったかも知れない。しかしそれはダイヤを散りばめたような黄金の灯だった。

函館、神戸、香港など100万ドルの夜景と称されるが、この夜見た夜景はその比ではないすばらしい灯だった。

今まで数年間、日本の都市の全ては灯火管制であり、少しでも窓から灯がもれたら集中して怒声が響いた。それは「利敵行為」であり、敵機を招くスパイの行為であった。

安心して灯りがつけられる。それも煌々と外を照らして遠慮なく。

「平和」の価値のすばらしさを味わされた出来事だった。